

酒田市文化資料館光丘文庫開館記念

日本の中の 酒田

～来訪者が見た湊町さかたの情景～

此所は羽州第一の津湊、市中三千余軒、
商家にて人物言語大概にて、諸品乏しからず（東遊雜記）

令和 6 年

5月18日(土) ▶ 7月21日(日)

塞道絵幕「大寿和里大祭事」(部分) 酒田市指定文化財

【開館時間】 午前9時～午後4時30分まで
(最終入館は4時)

【休館日】 月曜日 (月曜日が休日の時は翌日)

【主催】 酒田市

酒田市文化資料館光丘文庫

〒998-0034

山形県酒田市中央西町2番59号

(酒田市総合文化センター内)

TEL : 0234-22-0551

FAX : 0234-22-0612

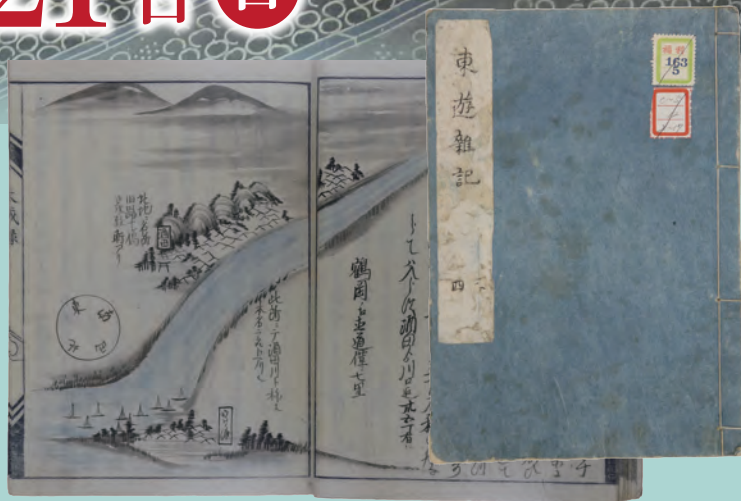
mail : bunkashiryokan@city.sakata.yamagata.jp

こうきゅう

入館
無料



ホームページはこちら→



古川古松軒『東遊雜記』(写本)

旅行家・地理学者の古川古松軒は、天明8年(1788)、江戸幕府の巡見使に随行して東北から蝦夷地(北海道)を視察し、酒田にも訪れました。絵図を交えて、酒田や鳥海山などについての印象を記しています。

江戸時代の寛文12年(1672)、出羽国の御城米(幕府直轄地の年貢米)を江戸に運ぶため、河村瑞賢によって西廻り航路が整備されました。最上川の河口に位置し、航路の起点となった酒田は、日本海交易の拠点として発展を遂げ、日本有数の湊町として広く知られるようになりました。その情景は、来訪者の目にはどのように映ってきたのでしょうか。

本企画展では、江戸時代から明治、大正、昭和にかけて酒田を訪れた人々が記した紀行をはじめ、酒田・庄内の景色を描いた絵や版画など、往時の酒田のにぎわい、湊や町の風景、人々の暮らし、食や文化などを伝える資料を紹介します。

庄内藩を揺るがした天保の「三方領知替」の資料であり、当時の酒田の様子を、幅9.7メートルの幕に生き生きと描いた、塞道絵幕「大壽和里大祭事」(酒田市指定文化財)も展示します。

改めて酒田の特色・魅力を知る機会になれば幸いです。



二代歌川広重

「諸国名所百景 出羽鳥海山」

万延元年(1860)制作。実際に酒田を訪れて見た景色ではないと思われます。文久2年(1862)の「諸国六十八景」では、日本海の荒波と鳥海山を描いています。

日
和
阜
に
於
い
て
納
涼、

夕
景
言
う
べ
か
ら
ず

(酒田往復記録)



荻戸善政「酒田往復記録」(公財)本間美術館蔵

荻戸善政は米沢藩の家老。上杉鷹山に託された藩の財政改革のために本間光丘から金子2500両の援助を受け、直接お礼をするために寛政6年(1794)7月に酒田を訪れました。その時の日記と絵です。光丘の案内で山王社(下日枝神社)を訪れたり、日和阜(日和山)からの夕景を見たようです。日和阜には、現存するものとしては日本最古級の方角石も描かれています。

酒田より一ニ里も来ぬらんと思ふ頃より、
北風強く吹起り、砂の飛散ることおびただしく、

(東遊記)



橘南谿『東遊記』

京都の医師・橘南谿は薬草採取のために旅をし、その記録を『東遊記』『西遊記』にまとめた。酒田に来たのは天明4年(1784)3月。「吹浦の砂蹟」と題し、酒田から吹浦に向かう途中、強い北風に吹き上げられた砂で何も見えなくなったことを書いています。



若山牧水が乗った定期船「度津丸」。手前は羽田大橋ができるまで運航していた、最上川の渡し船です。明治末に撮影。



日和山公園にある若山牧水の歌碑。旅と酒を愛した歌人・若山牧水は、大正6年(1917)8月に来酒。2泊した後、新潟と酒田を結ぶ定期船「度津丸」で酒田を離れました。日和山公園にある歌碑には、著書『北国紀行』の文章と、酒田を詠んだ歌が刻まれています。

砂山の蔭にや早やなりぬ何やらむ
別れの惜しき酒田の港

(酒田を詠んだ若山牧水の歌)

土門拳が酒田の風景を撮影した写真(土門拳記念館蔵)も展示します。



土門拳が撮った山王祭の写真を掲載した「婦人画報」昭和32年(1957)8月1日発行。「みちのくの港町—酒田風物誌—」と題し、土門拳が撮影した酒田山王祭(酒田まつり)の写真を掲載し、酒田の歴史を紹介しています。土門が里帰りしたのは、6歳のころに酒田を離れてから実に40年ぶりのことでした。

展示期間中の関連企画

①まち歩き「おすわり幕のまちなみを歩く」

②展示解説

詳細が決まり次第、市ホームページなどでお知らせします。

【交通のご案内】

- ・JR 羽越線酒田駅より徒歩約14分
- ・日本海東北自動車道 酒田ICより車で約12分

